



ばとうかんのん 近江の馬頭観音

彦根城博物館学芸史料課
学芸係長 齋藤 望

路傍の「馬頭観世音」

街道沿い、あるいは村道の傍らに「馬頭観世音」と刻んだ石塔を見ることがあります。中山道の宿場町であった近江八幡市武佐にある石塔(図1)も、その一例です。現在はもとあった場所を離れていますが、かつては街道筋にあったと言います。

もともと、全国的に見ると、このように文字を刻むのは少数派で、馬頭観音の図像を彫りあらわした石仏が一般的です。

この石塔は背面に、「安政4年(1857)に、馬を使っている宿場の仲間たちが、養っている馬の安全のためにこれを建てた」と記されています。死んだ馬の冥福を祈り、また往来の馬の無事を願って作られたものです。江戸時代の武佐には、輸送に使われる馬が50頭もいたのです。人々の生活と馬とが密接な関係にあった時代の様子が窺えます。

日本人と馬

現代の私たちが、日常生活のなかで馬を目にするのは、まずないといってよいでしょう。しかし、日本人と馬とのつきあいは古く、馬は人々の重要なパートナーでした。

馬は貴人の乗用であり、また軍用として、武士は馬を自在に操り、馬上で弓を射る技術を誇りました。その一方で、時代や地域によって用いられかたは異なりますが、通信や運送手段、そして農耕の働き手としても、なくてはならない動物だったのです。

さらに、こうした実用ばかりでなく、馬は祭祀と密接な関係があったことが指摘できま

す。今でも神社に行くと、厩に神馬が飼育されていることがあります。これは、馬が神の乗物とされ、神に何か祈りごとをするときには、馬を奉ったことによります。日照りが続き雨が降るのを願うときは黒毛の馬を、降り続く雨を止ませたいときには白毛の馬という決まりもありました。

しかし、生きた馬を、いつでも誰もが奉納できるわけではないので、馬の形を象った土製のミニチュアや、薄い木の板を馬の形に切り取った形代が、古墳時代から平安時代の祭祀に関係する遺跡から出土します。

また木製の小型の神馬も作られました。野洲市の御上神社には、平安時代後期の神馬の像、同じく野洲市の兵主神社にも、鞍をつけ美しく飾られた鎌倉時代と室町時代の2軀の飾



図1 馬頭観世音石塔



図2 馬頭観音坐像 山門区

り馬の像（県指定文化財）があります。

神に願いを掛ける“絵馬”が、奈良時代から現代にいたるまで連続と続いていることから見ても、馬は神の乗る動物である、という考

え方が、古代以来ずっと続いてきたことがわかります。

馬頭観音

さて、馬頭観音は、もともとはインドの神で、仏教の中に取り入れられ、密教の伝播とともに日本に伝えられました。複数の頭部と多くの手をもつ多面多臂の变化観音（観音菩薩が衆生を救うために、様々な形に姿を変えた諸尊）のひとつです。像容は、顔と手の数を3面8臂とするのが一般的ですが、教典の説くところによれば、1面2臂から4面8臂までのバリ

エーションがあります。顔には3つの目があり、頭上に馬の頭部をいただきます。

慈悲の相を基本とする観音のなかにあつて、目を怒らし髪を逆立て、口には上向きの牙をあらわすなど、怒りを含んだ顔つきに作られるところが変わっています。このことから、馬頭明王（明王は忿怒の相を示し、諸悪を降伏する諸尊）とも呼ばれ、八大明王の一つにも数えられています。

教典を見ると馬頭観音は、災いを絶ち、病を除き、また天変地異や侵略内乱を除くなど、多くの効能が説かれています。観音の中でも特に威力の強い尊像とされていたようです。

奈良時代に日本に伝えられ、平安時代になると、密教では六道（善悪の業によって生死を繰り返す6つの世界）に輪廻する衆生を救う六観音の中の1尊とされました。馬頭観音には、獣の姿に生まれて苦しむ畜生道が当てられています。江戸時代の馬頭観音石仏や石塔の流行は、このことによるのでしょうか。

独尊、また六観音のなかの1尊として、彫像、画像ともに作例が知られますが、仏像全体の中でいえば、その数はけして多いとはいえません。さほど広範な信仰を得ていたわけではなさそうです。

湖北の馬頭観音

西浅井町山門区には、平安時代の中頃に作られた本格的な馬頭観音坐像（図2、県指定文化財、像高103.2cm）があります。

3面6臂で、大ぶりの馬頭や脇面、厚みのある胸部をそなえ、各部を大づかみとする彫法には重厚な感覚があります。11世紀前半の制作と推定されます。像の根幹部をほとんどヒノキの一材から彫出し、内削りを施さない一木造りになります。脇手や両足の部分は、江戸時代に補われたものなので、当初の形はわかりませんが、他の例のように8臂像で、右膝を立てた姿だったのでしょうか。現在は黒と朱の漆で彩色されていますが、背面を見る



図3 馬頭観音立像 徳円寺

と彩色しないで木肌があらわれているので、もともとは素木像だったと想像されます。

次いで、山門から南西へ約1キロメートル、西浅井町庄の徳円寺の秘仏本尊も、馬頭観音の立像(図3、県指定文化財、像高80.0cm)です。3面8臂で、鎌倉時代の制作とみられます。

頭体のほとんどをカヤの一材から彫り出し、内刳りを施していません。寄木造りが一般的なこの時期としては古い作り方で、しかも彩色をしない素木像であることが注意されます。面貌には気迫がこもりますが、厚手の衣の彫法などから見ると13世紀後半から14世紀へ入る頃の制作と推定されます。

立像ながら、爪先を上げて足裏を見せるところに特徴があります。なんとも不安定な感じがしますが、坐像の馬頭観音で足裏をあらわすものがあるので、それを立像に適用したのでしょうか。

横山明神と馬頭観音

ところで中世には、神は仏教の仏菩薩などの諸尊が、衆生を済うために仮に日本の神と成ってあらわれたとする本地垂迹の考え方が

広く行われていました。

木之本町杉野に鎮座する横山神社の神は、杉野の北に聳える横山岳(標高1132m)に、白馬に乗り虚空を飛行して天降ったといわれます。この横山明神の本地は、馬頭観音とされていました。神社には、鎌倉時代から室町時代にいたる、60点にも及ぶ懸仏が伝えられ、中に南北朝時代の馬頭観音懸仏があります。神前に懸けて神の本地をあらわしたのでしょう。

高月町横山の横山神社は、杉野の横山明神を勧請したもので、ここにも馬頭観音の立像(図4、町指定文化財、像高100.0cm、高月町観音の里資料館寄託)が伝えられています。3面8臂で、像のスタイルは平安時代後期の形を基本とし、彫り口には鎌倉時代風の要素も認められます。12世紀から13世紀の制作でしょう。頭頂の馬頭や脇手は、後世に補われたものになっています。

注意すべきは、この像も彩色を施さない素木像で、よく見ると顔には細かいノミ痕があり、後頭部や背面の腰の部分などにも丸ノミの痕があることです。脇手など除いて本体のほとんどをヒノキの一材から彫り出すことも、この時代としては古い作り方です。

素木像であることや、ノミ痕をとどめること、一木造りであることなどは、霊験仏や神に関わる造像にまみ見受けられる特徴です。横山神社像は、横山明神の本地仏であることをあらわすために、あえてこのような技法で作られたのでしょうか。こうしてみると、山門区像や徳円寺像が一木造りで素木像なのも、同様の理由が考えられるかもしれません。

さらに横山明神に関連する像があります。木之本町の鶏足寺には鎮守神の十所権現社が祀られ、本地仏10軀があります。このなかの横山明神の本地仏像(図5、県指定文化財、像高29.4cm)は、3面8臂、ヒノキ材の一木造りで、現状では素地を呈します。12世紀の制作と推定されますが、馬頭の前面や脇手は後世のものになっています。両膝を立てて坐る



図4 馬頭観音立像 横山神社

形に特徴があり、他に例がありません。ここでは、横山明神と馬頭観音とが習合して、こうした特異な姿をとったということができるでしょう。

近江の馬頭観音信仰

馬頭観音の古像は、日本全国に平均して分布しているわけではありません。湖北から若狭・丹後にかけての地域、そして少し離れて愛知県の三河地方に集まって残されていることが指摘されています。

鎌倉時代以前の作例で見ると、若狭と丹後の境にある青葉山（標高699m）の周辺には、平安時代後期の高浜町・馬居寺像（重要文化財）、そして鎌倉時代の高浜町・中山寺像（重要文化財）があり、西国三十三所観音霊場の舞鶴市・松尾寺には、秘仏本尊として馬頭観音がまつられています（前立ち像は鎌倉時代後期の作）。そして、湖北にはこれまで見てきたように4例があります。

なぜ、この地に馬頭観音像が集中しているのでしょうか。古代中世には、江戸時代の馬の守り神としての馬頭観音とは、また違った



図5 馬頭観音坐像 鶏足寺

信仰があったようです。

外敵を防ぐ、あるいは水難を逃れる、また古代の韓神（漢神）信仰を底流とする呪術的な信仰に発するとみる説などがあります。韓神の祭祀では、馬や牛などの動物を生け贄に捧げる儀礼を伴うことがあったからです。

いずれも魅力ある説ですが、当否にはわかりには判断できません。しかし、この地域の馬頭観音像が、少なからず神との関係を窺わせることからみれば、聖なる山岳と神と馬、という信仰の繋がりがあることは確かなように思われます。越の大徳と呼ばれ、白山を開いたことで名高い泰澄に代表される山岳修行者との関わりを指摘する見解もあります。

人々が、馬頭観音に何を求めてこれらの像を造立したのかは、これからよく考えてみなければならぬ問題です。現代ではわかりにくくなっている古代、中世の近江の人々の信仰の世界を読み解く鍵が、ここにもあります。

滋賀文化財教室シリーズ No.218号

発行年月日 2006年3月100日
 編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
 〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
 TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525